

第5週金曜日

第5歌頌 (預言者イサイヤの歌句、イサイヤ26:9-19)

神よ、我が神^oは夜中より爾を慕ふ、蓋爾の誠は地に在りて光なり。地に居る者は義を学べ。不虔の者は恩を承くれども義を学ばず、直き者の地に居りて猶不義を行ひ、主の威厳を顧みざらん。

十四段に、

主よ、爾の手は高く挙げたり、然れども彼等は之を見ざりき、爾の民を悪む者は之を見て愧ぢん、火は爾の敵を嚙まん。主我が神よ、我等に平安を與へ給へ、蓋凡の事は爾我等に報いたり。主我が神よ、我等を獲よ、主よ、我等は爾の外に他の者を識らず、爾の名を唱ふ。彼等死して復活きず、滅びて復起きざらん。蓋爾は彼等を糺して之を滅し、彼等の記念を全く失はしめたり。主よ、彼等に艱難を加へ、地の驕れる者に艱難を加へよ。

八段に、

イルモス 1調「己の降臨の光にて世界の極を照し」。

主よ、患難の時我等爾を尋ね、爾の懲罰の我等に及べる時靜に禱を為せり。

天を幔の如く張りたる至仁なるイイススよ、爾は十字架の上に手を舒べ給へり。故に爾に祈る、敵の誘惑に由りて仆されたる我を憐み給へ。

妊める婦の産に臨みて苦しみ、其痛に由りて號ぶが如く、主よ、我等は爾の前に是くの如くなりき。

至仁なる主イイススよ、爾は十字架に寝りて、我等最下なる滅亡の處に臥す者に救の警醒を賜へり。故に我等熱信に爾を讃榮す。

主よ、我等爾を畏るるに因りて妊みて苦勞し、爾の救の神を生みて、之を地に施せり。

救世主よ、爾の諸僕に心の潔淨に明にせられて、爾の苦の日及び生活を施す爾の復活を見て、爾の國の權能を歌ふを得しめ給へ。

我等主を頼みて亡びず、唯地上に居りて地を頼む者は亡びん。

生神女讃詞、純潔なる者は爾が十字架に挙げられしを見て、心刺されて呼びて云へり、主よ、爾は仁慈の洪恩の爲に苦を忍びて、衆に苦なきを與へ給ふ。

四段に、

イルモス「人を愛する主よ、祈る、夜より寤むる」6調。

爾の死者は復活し、墓に在る者は起き、地に在る者は樂しまん。

人を愛する主よ、爾己の手を十字架に舒べたるに、イウデヤ人は釘を以て之を打ちつけ、戈を以て爾の脅を刺せり。ハリストスよ、爾は一切を忍び給へり、我等が救はれん爲なり。

蓋爾よりする露は彼等の爲に醫治なり、地は其死者を出さん。

昔木の果を食ふに由りて死せしアダムは十字架の木に縁りて復生を得、此を以て樂園の中に洪恩の糧を樂しむ。

光榮は父と子と聖神に帰す

三者讃詞、聖三者よ、我は爾神性の惟一なる者、無原にして造られざる者、萬有の宰及び王たる者、至りて完全なる惟一者、神、光、及び生命、世界の造成主を歌頌す。

今も何時も世々にアミン

生神女讃詞、潔き者よ、爾の性に超ゆる産に於て明に性の法は解かる、蓋爾は種なくして永久の神、父より生れし主を生み給へり

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

主宰ハリストスよ、我等は爾の十字架、戈、及び釘を貴む、蓋爾は此等を以て我等を朽壞より救ひ、爾の苦にて我等を不死の者と爲し給へり。

イルモス 「人を愛する主よ、祈る、夜より寤むる者を照し、我をも爾の誠に導き、救世主よ、我に爾の旨を行ふを訓へ給へ。」

第5歌頌

人を愛する主よ、いのる、夜より覚むるものを
照らし、われをも爾の誠めにみちびき、
救世主よ、我に爾の旨をおしえたまえ。

【小連禱】（斎調で）

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん、

（詠）主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ、

（詠）主憐めよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

（詠）主爾に

司祭 蓋爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神^①に獻ず、今も何時も世世に、

（詠）「アミン」

第8歌頌（三少者の歌句、ダニエル3:57-88）

主の悉くの造物は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。主の諸天使と主の諸天は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。諸天の上に在る水と、主の萬軍は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。日と月と、天の星は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。雨と露と、諸の風は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

十四段に、

火と熱、寒と暑は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。露と霜、氷と嚴寒は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。霰と雪、夜と晝は主を崇め讃めよ彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。光と暗、電と雲は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。山と邱、地と地上の植物は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。諸の泉と、海と河、鯨と凡そ水に泳ぐ者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

八段に、

イルモス、「露を出す爐は天然に超ゆる奇跡」。

天の諸の鳥と、野獣と、一切の家畜は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

救世主よ、爾は釘を以て木に打ちつけられて、兇悪者の刺を鈍くし、汚辱の棘を冠らせられて、犯罪の棘を絶し給へり。故に我等歌ひて爾に呼ぶ、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

人の諸子と、イスライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

ハリストスよ、爾は十字架に手を舒べて、人類を爾を識る智識に集め、戈にて爾の脅の刺さるるを忍びて、我等の爲に救の泉を流して歌はしむ、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

主の司祭と、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

洪恩なるハリストスよ、爾の慈憐の流を以て罪の傷に由りて汚されたる吾が心を潔め給へ。ハリストスイイススよ、我に傷感の河を流すを得しめ給へ、我が爾に呼ばん爲なり、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

諸神と諸聖人の霊、諸義人と心の謙卑なる者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

(生神女讃詞) 童貞女よ、我等は爾を神性の「マンナ」を納るる聖なる壺、約匱と筵と燈臺、神の寶座と宮、及び神聖なる生命に度す橋と知りて歌ふ、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

イルモス「我等は少者の歌に效ひて」。

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

至聖なる木、我がハリストスが其上に釘せられし者よ、我爾を歌ひて、万世に崇め讃めん。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

ハリストスは十字架に釘せられ、我は活かされて、少者と偕に歌ふ、主の造物は主を崇めて、世世に彼を讃め揚げよ。

我等主なる父と子と聖神^oとを崇め讃めん、

(聖三讃詞) 同一に讃榮せらるる三者、永在なる惟一者、父、子、聖神よ、信を以て爾を歌ふ者を救ひ給へ。

今も何時も世世に、「アミン」。

(生神女讃詞) 我潔き生神女の産に伏拜して、少者と偕に歌ふ、主の造物は主を崇めて、世世に彼を讃め揚げよ。

我等の神よ、光榮は爾に帰す、光榮は爾に帰す。

ハリストスよ、我は爾の十字架、爾が此を以て我を救ひし者を歌頌して、少者と偕に歌ふ、主の造物は主を崇めて、世世に彼を讃め揚げよ。

我等主を讃め、崇め、伏し拝みて、世世に歌い讃めん。

[イルモス] 我等は少者の歌に效ひて、彼等と偕にハリストスに歌はん、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚ぐべし。

我等神を讃め崇め、伏し 拝みて 世 世 にうたい 讃めん
我等は少者の 歌にならいて 彼らとともにハリストスに
うたわん 悉くの 造-ぶつは 主を あがめて
萬 世に 讃めあぐ べし

司祭 生神女光の母を^{ほめうた}讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

第1句 我が心は主を崇め、我が^{たましい}靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

第1句
我が心は主を あがめ 我が靈は神我が救主を 喜こーぶ
附唱
ヘルビムより 尊とく セラフィムに並びなく さかえ 貞操を
破らずして神言を生みし 実の生神女たる 爾をあげめ讃む

第2句 その婢の卑しきを願^{かえり}み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

→附唱ヘルビムより尊く

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん →附唱ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、→附唱ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。 →附唱ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、 →附唱ヘルビムより尊く

第9 歌頌

祝讀せらるる哉主、イズライリの神、蓋其民を眷みて之に購を為し、我等の爲に救の角を其僕ダウィドの家に興せり、古世より其聖なる預言者の口を以て言ひしが如し、即我等を我が諸敵及び凡そ我等を悪む者の手より救ひ、以て矜恤を我が先祖に施し、

八段に、

イルモス「生神女よ、燃ゆれども焼かれぬ棘は」。

其聖なる約 即 我が祖アウラアムに矢ひたる誓を記念せん、

イリヤは先づ祈禱と齋とを以て肉體を軽くして、主を微なる風の中に見たり。吾が靈よ、彼に效ひて、逸樂の籠きを遠ざけよ、慕ふ者を見ん爲なり。

謂ふ、我等に我が諸敵の手より救はれし後、懼れなく、彼の前に在りて、聖を以て、義を以て、生涯彼に事へしめんと。

至仁なる救世主よ、昔モイセイは蛇を木の上に擧げて、爾が十字架に擧げらるるを預象せり。爾は此を以て爾に伏拜する萬族を蛇の毒悪より救ひ給へり。

子よ、爾も至上者の預言者と称へられん、蓋主の面前に行きてその道を備へん、

救世主よ、我は怠惰の墓に臥し、頑固の石に壓せられて、爾の永在なる言を悟らず、爾を畏るる畏を感じず。大仁慈なる主よ、我を憐みて、爾の仁愛を以て救ひ給へ。

彼の民に、その救いは即ち諸罪の赦しにして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。

(生神女讚詞) 萬衆より上なる女宰よ、我を悪慾より上なる者と爲し給へ。神の恩寵を蒙れる潔き者よ、我爾眞の生神女を讚榮し、悟に超ゆる最尊き爾の産を歌ふ。

イルモス、「種なき胎の産は言ひ難し」。

此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、

爾は十字架に釘せられて、我を救ひ、死して、我を活かし給ふ。嗚呼慈憐や、嗚呼爾の仁愛や、主宰が僕の爲に恥づべき死を受くるを誰か見誰か聞きたる。主よ、光榮は爾の言ひ難き仁慈に歸す。

幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。

日は爾の釘せらるるを見る時晦みたり、蓋己の造成主の辱かしめらるるを見て、如何ぞ隠れざらん。衆造物も亦擾れて、釘する者に黙して爾の事を呼べり、爾は身にて苦に與ると雖、萬有の神なり。

光榮は父と子と聖神に歸す

(聖三讚詞) 獨一子の父、獨一の光の輝煌、獨一の神の聖神よ、嗚呼聖なる三者惟一者よ、我爾を讚揚する者を救ひ給へ。

今も何時も世々にアミン

(生神女讚詞) 純潔なる者よ、爾の産の奇跡は我を驚かす、如何ぞ爾は種なくして限られぬ主を孕みたる、言へ、如何ぞ母として生みて、童貞女に止まる。性に超ゆることを信を以て受けて、生れし者に伏拜せよ、蓋彼は欲する所を能す。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

爾の百體は各我等の爲に苦を受けたり、首は葦にて撃たるるを、頬は掌にて批たる

るを、雙手は釘せらるるを、脅は戈にて刺さるるを、全身は十字架に擧げらるるを。
我が救世主よ、光榮は爾の言ひ難き慈憐に歸す。

〔イルモス〕種なき胎の産は言ひ難し、夫を知らざる母の果は朽ちず、神を生む産は天性
を改むればなり。故に我等萬族爾を神の聘女なる母として、正しく崇め讃む。

第9歌頌

たね なき ほうらごもり の さん は 言いがたし、
種 なき 胎 の 産 は 言いがたし、

夫 を 知らざる母の果は朽ちず、 神を生む産は
夫 を 知らざる母の果は朽ちず、 神を生む産は

てんせい を あらた むればなり、 故に我等 萬世 爾を
天性を 改 むればなり、 故に我等 萬世 爾を

神の嫁なる ははとして、 正しくあがめ 讃む。
神の嫁なる ははとして、 正しくあがめ 讃む。

常に福にして (6調)

小連禱